岩崎英二郎編『ドイツ語副詞辞典』

(白水社 1998)

有　田　　潤

辞典の評価はむずかしい。全部を読み通すことは困難であるし，といって部分を観察しただけでは偏頗なものになりかねない。本稿はこの大著に対する心からの敬意の念を認め，かついささか管見を述べるにとどまろう。

§1. 構　成

約30年前，岩崎・小野寺両氏共編の『ドイツ語不変化詞辞典』(以下『前著』) が出版されたとき，わがドイツ語界は多年の渇望を癒されたはずである。その後岩崎氏は鋭意文例収集に努められ，ここに『前著』の約3倍に達する副詞の辞典を上木された。筆者はまず氏の熱意と学識に最大級の賛辞を呈したい。本辞典は1500ページに及ぶ浩瀚なもので，副詞専用の辞書としてはわが国で出版された最初の業績というべきであろう (以下『辞典』)。

まず，収録された語彙を種類別にすると下記のようになる。

(1) 本来の副詞。「本来の」とはその語が副詞以外には用いられない，の意である。
例：draußen, überall, unten, usw.

(2) 副詞句：2語以上の副詞。例：am besten, im mindesten, zum erstenmal, von Stund an, von Zeit zu Zeit, usw.

(3) 形容詞：gut, schön, schlecht, usw.

(4) 前置詞：an, auf, vor, zu, usw.　前置詞は名詞・代名詞の格を支配する品詞であり，単独では副詞にならない。bis, hinter, in, von 等がみられないのはこのためである。ここに取りあげられた an, über 等は前置詞とは異なる機能をもつものとして解説されている。

(5) 接続詞：allein, da, damit, denn, wie, usw. それぞれの項末で接続詞としての用法が指摘されている。

§2. 形容詞，gut 等

ヨーロッパの言語には，一般の形容詞を副詞にする場合に固有の語形を用いるものが多い。希：-ως, -ῶς.　羅：-e, -o, -iter, -um.　伊・西：-mente.　仏：-ment.　英：-ly.　エスペラント：-e 等。ところがドイツ語では，一般の形容詞はたいていそのまま副詞としても用いられるから，副詞辞典は形式的にはこれらを含まねばならなくなるが，著者は実用的見地から，schön, gut, rund などの，副詞として重要とみられるものを見出し語にし，説明の末尾で，たとえば gut の項には「同音・同形の語として，形容詞 gut がある」のように断

わっている。『前著』でも，「辞書としての実用的な見地から」gut, schön, stark 等を収録した，とされている。また著者が，たとえば schließlich の項末で，形容詞になるが述語的には用いられない，と注意しているのは注目すべきで，-lich 型の形容詞は冠置用法だけで，述語にならないものが多い。

例：eigentlich, gelegentlich, mutmaßlich, unaufhörlich, zeitlich 等。

備考：よくいわれる「付加語」「付加語的用法」の語は適当でないと筆者は考える。

§3. her による『前著』との比較

her を例にとって両著を比較・対照してみよう。her は前置詞にならないから妥当な比較ができる。

(1) 指摘された項目は，順序の入れ替えがあるほかは，両著でほぼ同一である。『辞典』では aus . . . her が追加された。

(2) 量的には『辞典』の her は『前著』の約 3 倍に相当し，これはだいたい全体の規模に比例する。

(3)『辞典』の量の増大は文例数がふえたことのほかに，長文が多数収録されたことによる。その 1 例：

Ich habe diese Zeilen im äquatorialen Busch geschrieben. Hier denkt und fühlt man anders als vor einem Schreibtisch in Europa. Ich will mich in Europa nicht korrigieren. Mein ganzes Bemühen geht darum, Afrika *von Afrika her* zu verstehen. (S. 529)

(4) her には Her mit dem Geld! のような純粋の副詞の用法もむろんあるが，

(i) 分離動詞の前つづりの場合と，

(ii) von . . . her, um . . . her などの「追加詞」の場合があり，

(iii) また追加詞はしばしば前つづりをかねる。

(5)『辞典』の❸〜❻に hersagen, hergehen, その他の分離動詞が挙げられているが，これは『副詞辞典』にしてはじめてなしうることで，特記すべきだとおもう（小学館『独和大辞典』her II 参照）。

(6) ただし項末に，her は前つづりになりうる，として 4 つの動詞が例示されているが，(4), (5) に記したとおり，her は本項のきわめて多くの文例で分離動詞をなしており，また，hersein のように，分離動詞としての扱いに問題のあるものもみられる。

(7) Woher kommen Sie? の her などは前つづりとはいえないけれども，この文は Wo kommen Sie her? と同意であり，こちらは分離動詞 herkommen であるから，ここにも her の特徴をみることができる。

(8)『前著』では her の項で，ふつう用いられる hin und her が見出しになっていた。しかし『辞典』では her und hin を掲げ hin und her を参照するようにしてある。

§4. 追加詞 an 等。

たとえば，われわれに前置詞として親しい an が本辞典に採用されているが，❷概数，

❸到着，❹着用，❺通電・作動，等を意味する特殊な場合のほかは，❶ von . . . an の an が主な用法として説かれている。これは『前著』では「追加詞」と呼ばれた（例：S. 30, 56, 638）が，今回は用語を平易にするために単に副詞とした，とのご連絡を岩崎氏からいただいた。英語でも，from that day on の on, from the day forth の forth を「副詞」としているから，実用上はこれで問題ないとおもうが，用法と品詞概念の厳密さを求める研究者に対しては，類似の語と対比しつつ整理する必要があるかもしれない。追加詞を含む 4 種を区別して，それぞれの特徴を記してみよう。分類は次のとおり。

(1) 格を支配する。
　(a) 格支配される語の前にある。　→前置詞
　(b) 格支配される語の後にある。　→後置詞
(2) 格を支配しない。
　(c) 前方に前置詞がある。　→追加詞
　(d) A 格の後に添加されるが，A 格を支配しない。
　　→添加副詞

(a) 前置詞：an, auf, hinter, . . .

(b) 後置詞：meiner Meinung nach のような「後置された前置詞」を筆者は「後置詞」と呼ぶ。『前著』では「後置されることもある」と書かれている (S. 387)。筆者は「後置詞」を採るが，これは単なる瑣末な字面の問題ではない。前置・後置で格支配や意味の差異が生ずることもあり，後置でも格支配の点に変わりがないから，この場合に限って「副詞」と呼ぶ理由はないとおもわれるし，「前」置詞もおかしい。「後置詞」の語は尊重していいのではなかろうか。

後置詞
den [dem] Bach *entlang*
└──←支配←──┘

(c) 追加詞：von älteren Zeiten her の her のように，前置詞の率いる句（前置詞句）の後ろに付加される語を「前置詞が後曳する追加詞」，略して「追加詞」といい（格を支配しない），前方の前置詞の意味を入念・画然とする機能をもつ。

前置詞　　追加詞
nach der Stadt *zu*
└──→支配→──┘

したがって『辞典』が副詞としている am Fluß entlang は筆者の用語では追加詞であり，『辞典』の前置詞 den Weg entlang, das Ufer entlang は後置詞となる (S. 382)。

(d) 添加副詞：『辞典』の hinauf を例にする。Der Weg hinauf war sehr steil. の hinauf は名詞付加的な（名詞規定の）副詞であるが，この語は多くの場合，動詞付加的な（同時に前つ

づりになりがちな) 副詞である。ただし，たとえば hinauf in die Höhe の hinauf は動詞付加的な副詞ではありうるが，文型上前つづりにはならない。ただし in die Höhe がワク外構造の場合は別である。

さて「しばしば場所を示す対格の名詞を伴って」として Sie ging langsam die Treppe hinauf. が挙げてある (S. 584) が，これを筆者は「添加副詞」と呼びたいとおもう。定義は，

副詞的用法の A 格名詞が空間的・時間的な広がり (Erstreckung) を示すときに，これに後続し，その副詞的機能を補足・拡充する副詞 (句)

であり，特徴は次のとおり。

(1) 必ず A 格名詞に後続するが，支配しないから後置詞ではない。
(2) 前置詞が先行しないから追加詞ではない。
(3) 計量の A 格に規定された形容詞・副詞 (例：drei Meter lang) ではない。

添加副詞は次の 4 つに添加される。

⇨ 持続の (時間的) A 格	die ganze Nacht hin
⇨ 経路の (空間的) A 格	die Straße hinauf
⇨ 隔たりの (時間的) A 格	eine Viertelstunde darauf
⇨ 隔たりの (空間的) A 格	zwei Kilometer davon

これらが先行名詞を「規定」するのでないことは，欠如しても名詞だけで文意が通達する場合があることで知られる。「添加副詞」と呼ぶ所以である。

§5. 述語型副詞

ab の項に《話》「疲労・困憊の状態を示」す文例：Mensch, bin ich ab! また zurück の項では Bist du schon zurück? の例が挙げてある。それぞれ abgespannt, zurückgekehrt と過去分詞を補って理解しうるが，こう補足しなければ意味不明というわけではないから，やはり ab, zurück を独立用法の副詞として扱うほうがいいとおもう。筆者はこれを「述語型副詞」と呼びたい。述語型副詞とはたとえば，

Mein Mann ist zurück.	主人は戻っております。
Der Deckel ist ab.	蓋がとれちゃった。
Das Licht ist aus.	灯火が消えている。
Das Fenster ist zu.	窓はしまっている。

における zurück, ab, aus, zu を指す。これらの特徴は次のとおり。

(1) 名詞・代名詞を支配しないから前置詞ではなく，副詞である。
(2) A ist B. の文型で B を「述語」(Prädikativ) と呼ぶならば，これらの副詞も述語の 1 種

とみなされる。しかし一般の述語は名詞，形容詞，分詞であるから，区別のために筆者はこれらを「述語型副詞」と称する。

(3) この場合の sein は結合の sein,「～である」sein であるが，類似の文型：Die Hütte ist dort. の sein は存在の sein,「～がある」の sein である点が異なる。

(4) 述語型副詞は前つづりまたは動詞規定部 (例：zu Ende, nach Haus) になりうるものが多い。

(5) 述語型副詞は空間関係あるいはその類似の観念を表わすことが多い。時間関係や程度を表現する heute, damals, dann, bald, äußerst, zu (あまりに) 等はこの述語型副詞のタイプではなく，前つづりにもならない。

(6)『前著』では Um halb sieben bin ich schon auf. の auf (S. 50); Der Krieg ist aus. の aus (S. 56) 等は，筆者の「述語型副詞」の語は用いられていないが，「述語形容詞的に用いられ」たと説明されている。

§6. 前置的接続詞。wie, als

『辞典』に als (接続詞) はない。さて『前著』の als の項で「単に語句を接合して前置詞のように感じられる場合」があると指摘された (S. 17)。これは als zufrieden, als in Europa, als Schauspieler などを指す。前置詞に似ているが，格支配がなく，語だけでなく文肢や文にも先立つから前置詞ではなく接続詞とみるべきで，関口氏は「前置的接続詞」と名づけた。als と wie (例：wie ich, wie in Deutschland) が主であるが，氏はこのほかに多数のものをあげている。nur [heute], auch [du], selbst [ich], kaum [das ABC], usw. 筆者はこれに außer, für, fast を加えることができるとおもう。『前著』の außer の項で，außer ihn, außer ich allein の場合を「接続詞とみなすこともできよう」とある (S. 61) のが注目される。

§7. おわりに

本『辞典』はその豊富な文例と的確・周到な説明によってわがドイツ語界に裨益するところ大であり，今後半永久的に学習者，研究者の座右の書となることは疑いをいれない。

附記：

(1) stehenden Fußes「たちどころに」の項に (伊 stante pede) とある (S. 1099) のは誤記であろう。これはラテン語の独立奪格句で，イタリア語では all' istante, su due piedi という。

(2) 格の名称は『前著』で 3 格，4 格，『辞典』では与格，対格となった。古典語やロシヤ語ではこの漢字の用語がふつうであろうが，ドイツ語では少し親しみが薄いのではなかろうか。筆者は N 格，A 格，D 格，G 格を用いる。拙著『ドイツ語学講座』2 章。

(3) 本稿に関連して『ドイツ語学講座』29，47，51 章を参照していただければ，まことにさいわいである。

1999 年 9 月